

ひとなみ座談会

ハラスメントについて 近年の村上春樹作品をベースに 抑圧と自己肯定感を考える

ここがポイント

① (幼少期等の) 抑圧によって「自己肯定感」がうまく育っていないと、生きづらいのでは？

② ハラスメントをしてしまう側も、受ける側も、①の状況は同じことが多い。

受ける側は、自ら選んだ境遇で不本意な暴力を受けた結果として「自己肯定感を破壊される」場合も。

※『1Q84 book1』p.389 (老婦人の実娘がDVを受けた経過説明)「娘は徐々に自尊心と自信を失い、追いつめられ、鬱状態に入りこんでいった。自立する力を奪い取られ、アリ地獄に墮ちたアリのように、そこから抜け出すことができなくなった。そしてあるとき、大量の睡眠薬をウイスキーと一緒に胃に流し込んだ。」

③ 「自己肯定感」と「自尊感情」は少し違うかも？



・アピールしなくても、自分で満足・充足できているのが、「自己肯定感」

・「仲間に恵まれてます！」、「こんな成果でした」etc. アピールしないと保てないのが「自尊感情」

④ ハラスメントを「する側」に多いのは、たりない自己肯定感を、「自尊感情」で埋めているタイプ？

※『1Q84 book1』p.390 (老婦人が娘婿を回想して語ったくだり)「その男は弱い人間でした。頭はそれなりに働かし、弁も立つし、世間的にはある程度認められてもいるのですが、根本は弱くて卑劣な男です。家庭内で妻や子供たちに激しい暴力を振るうのは、決まって弱い人格を持った男たちなのです。弱いからこそ、自分より弱い人間をみつめて餌食にせずにはいられないのです。」

(※以下は Wikipedia を参照しながら作成しました)

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』

◆ 登場人物整理

・多崎つくる (戸籍上は多崎作) ♂ 36歳、独身。木元沙羅と交際中だが、関係が発展しない。その原因として沙羅は、「高校時代の友人から理由も告げられずに絶交された過去と向きあう必要があるのでは」と考え、つくるが音信不通の仲間4人を訪ね歩く巡礼の旅をサポートする。名古屋の名門公立高校時代のグループ5人のなかで、つくるだけが東

京の大学へ進学。数年後に帰省したとき、唐突に4人と連絡を絶たれ、生死の境をさまようひきこもり状態となる。大学卒業後は、鉄道の駅の設計をする専門職に。高校時代、他の4人とくらべ「これという特徴なり個性を持ちあわせない人間」で、成績も中の上。授業はきちんと聞き、最低限の予習と復習は欠かさないが、勉強にさして興味を持っているわけでもない。運動も嫌いでないが、運動部に入って積極的に活動はしない。ときどきテニスをし、ときどきスキーに生き、ときどきプールで泳ぐ。顔立ちは整っていたが、「鏡で自分の顔を眺めていて、そこに救いがたい退屈さを感じる感じがしばしばあった」。芸術方面に関心があるわけでもなく、これという趣味や特技もない。どちらかといえば口が重く、よく顔が赤くなり、社交が苦手で、初対面の人と一緒にいると落ちつかない。5人の中では家庭はもっとも裕福。母方の叔母はベテラン女優で名前もまずまず知られている。ただひとつ趣味といえることは、鉄道駅を眺めること。

※「育ちの良いハンサムボーイ」、「清潔でござっぱりしていて、身だしなみも良く、礼儀正しく振る舞う。きちんと挨拶もできるし、つまらないことも言わない。(中略)おれたちの母親はみんなおまえのファンだった」が、自分では「個性のない(色彩のない)つまらない見かけだ」と思っている。

(アオの台詞)「いや、おまえは空っぽなんかじゃないよ。誰もそんな風に思っちゃいない。おまえは、なんとはいえいいんだろう、他のみんなの心を落ち着けてくれていた」「おまえがそこにいるだけで、おれたちはうまく自然におれたちでいられるようなところがあったんだ。おまえは多くをしゃべらなかつたが、地面にきちんと足をつけて生きていたし、それがグループに静かな安定感みたいなものを与えていた。船の碇のように。おまえがいなくなって、そのことがあらためて実感できた。おれたちにはやはりおまえという存在がひとつ必要だったんだって。そのせいかどうか、おまえがいなくなってから、おれたちは急にばらばらになっていった」

アカ(赤松 慶) ♂ つくるの高校時代の友人。名古屋在住。中京圏の企業を顧客に「クリエイティブ・ビジネスセミナー(社員教育のアウトソーシング)」を請け負うするビジネスで、「最も成功した30代の独身男性」の一人と女性誌に書かれるほどの成功をとげる。高校時代、成績は図抜けて優秀。それを鼻にかけることはなく、一步引いて周囲に気を配るところがあった。小柄。些細なことでも納得がいかないと譲らないこともあり、理屈の通らない規則や、能力に問題のある教師に対して真剣に腹を立てることもよくあった。生来の負けず嫌いで、テニスの試合に負けると不機嫌になった。父親は名古屋大学経済学部の教授。

※「どこから見ても絵に描いたような眼鏡の秀才」、「おれは一度結婚した。二十七のときに。でも一年半で離婚した」、「どうやらおれは人に使われることに向いていないらしい。一見そうは見えないし、おれ自身、大学を出て就職するまでは自分のそんな性格に気がつかなかつた。でも実にそうなんだ。ろくでもない連中から筋の通らない命令を受けたりすると、すぐ頭が切れちまう。ぷちんと音を立てて。そんな人間に会社勤めなんてできない。」

アオ(青海悦夫) ♂ つくるの高校時代の友人。名古屋在住。トヨタ自動車に勤務し、高級車レクサスを扱う営業マン。高校時代はラグビー部のフォワードで体格は申し分ない。性格は明るく、多くの人に好かれた。まっすぐ人の目を見て、よくとおる声で話した。驚くほどの大食漢で、なんでも実にうまそうに食べた。悪口は滅多に口にせず、人の名前と顔をすぐに覚えた。よく人の話を聞き、場をまとめるのが得意だった。

※「おれの顔は、個性があるといえばあるけど、まるでゴリラ」

シロ(白根柚木) ♀ つくるの高校時代の友人。音大卒業後、しばらく自宅でピアノの先生をしていたが、やがて家を出て浜松市内で一人暮らしに。2年ほどして、マンションの部屋で絞殺された。犯人は不明。古い日本人形を思わせる端正な顔立ち。長身でほっそり。モデルのような体型。髪は長く美しく、艶のある漆黒。通りですれ違った多くの人が、思わず振り返ってしまう。しかし本人はどことなく自分の美しさを持って余しているような印象があり、生真面目な性格で、何によらず人の注目を引くことが苦手だった。美しく巧みにピアノを弾いたが、知らない人がいる前でその腕前を披露することはまずなかった。アフタースクールで子どもたちにピアノを教えているとき、ことのほか幸福そう。それほど明るくのびやかな顔を、ほかでは見ないというくらい。普段は無口だが、生き物好きで、犬や猫の話になると目が輝く。父親は名古屋市内で産婦人科医院を経営。その関係でシロは墮胎に強く反対しており、性的なものごとに対して、恐怖心というくらいのとて強い嫌悪感を持っていた。大学時代に妊娠・流産したあと、月経を止めるため拒食症に。

※「可憐な乙女」、「内気なとびっきりの美人」、(アカの台詞)「あいつは肉体的に殺害される前から、ある意味では生命を奪われていた」、「彼女はおれの心にとっても深い穴をひとつ開けていったし、その穴はまだ埋められていない」

クオ(黒埜恵里) ♀ つくるの高校時代の友人。精神を病んだシロの世話に明け暮れる数年間を過ごしたあと、愛知芸大の工芸科に入り直した。そこで、フィンランドから来日していた男性と知り合い結婚。8年前からフィンランドに住む。容貌は十人並みよりはいくらか上。でも表情が生き生きとして、愛嬌があった。大柄で全体にふっくらとして、十六歳のときから既にしっかり胸が大きかった。自立心が強く、性格はタフで、早口で、頭の回転も同じくらい速かった。文系の成績は優秀だったが、理系はひどかった。父親は名古屋市内に税理士事務所をかまえていた。シロとは中学のときもクラスが一緒だった。

※「機転の利くコメディアン」、「聡明で皮肉屋のコメディアン」

木元沙羅 つくるの交際相手。つくるより2歳年上。大手の旅行会社に勤務。私立の女子校育ち。高校時代は、「ごく正直に言って、私はぜんぜん目立たない存在だった。学校というシステムにあまり合わなかったんだと思う。先生に可愛がられることもなく、下級生に憧れられることもあまりなかった。ボーイフレンドなんて影もかたちもなかったし、しつこいきびにも悩まされていた。『ワム!』のCDも全部持っていた。母親の買ってくれる白い Cotton のさえない下着を着ていた。でもそんな私にも良い友だちは何人かいた。二人くらいね。あなたの五人組のように緊密な共同体といまではいかなかったけれど、それでも心のうちを打ち明けられる親友だった。だからそんなぱつとしない十代の日々を、なんとかこともなく乗り切ることができたのかもしれない」

灰田文紹 つくるの大学時代の数少ない友人。小柄でハンサム。学年はつくるの2つ下。高校時代の4人と理由を知らされないまま音信不通になったあと、つくるは灰田との邂逅によって少しずつ日常を取り戻す。しかし、その灰田も、新学期を前に突然大学から姿を消した。

灰田の父 大学闘争時代に大学を休学し、1年間の放浪生活を送る。その間に、緑川と出会う。灰田がつくと交友していた頃は、秋田の公立大学で哲学科の教師をしていた。

緑川 灰田の父が学生時代にアルバイトしていた温泉宿の長期逗留客。ピアニスト。不思議な布袋を鍵盤に置いてから、印象的な演奏をする。灰田の父に、「受けとると死ぬ」という“死のトークン”の話をする。

◆気になるフレーズ

・p.20 (沙羅との今後の関係について、つくるの感情) 人と人との結びつきなのだ。受け取るものがあれば、差し出すものがなくてはならない。

・p.109「誰かを真剣に愛するようになり、必要とするようになり、そのあげくにある日突然、何の前置きもなくその相手がどこかに姿を消して、一人であとに取り残されることを僕は怯えていたのかもしれない」

「だからあなたはいつも意識的にせよ無意識的にせよ、相手とのあいだに適当な距離を置くようにしていた。あるいは適当な距離を置くことのできる女性を選んでた。自分が傷つかずに済むように。そういうこと？」

つくるは黙っていた。その沈黙は、同意を意味していた。ただ同時に、問題の本質がそれだけではないこともつくるにはわかっていた。

・p.186（アカの台詞）「おれが会社勤めからもうひとつ学んだのは、世の中の大抵の人間は、他人から命令を受け、それに従うこととくに抵抗を感じていないということだ。むしろ人から命令されることに喜びさえ覚えている。むろん文句は言うが、それは本気じゃない。ただ習慣的にぶつぶつこぼしているだけだ。自分の頭でものを考えろ、責任を持って判断しろと言われると、彼らは混乱する。じゃあ、そいつをビジネスにすればいいじゃないかとおれは考えた。簡単なことだ。わかるか？

（中略）そしておれは自分が好きじゃないこと、やりたくないこと、してほしくないことを思いつく限りリストアップしてみた。そしてそのリストを基に、こうすれば上からの命令に従って系統的に動く人材を、効率よく養成できるというプログラムを考案した。」

「でも研修を受けた人間が、みんな素直にディシプリンを叩き込まれてくれるわけじゃないだろう」

「もちろんだ。おれたちのプログラムをまったく受け付けられない人間も少なからずいる。そういう人間は二種類に分けられる。ひとつは反社会的な人間だ。英語で言うとアウトキャスト。こいつらは建設的な姿勢をとるものには何によらず、頭から受け付けられない。あるいは団体の規律に組み込まれることをよしとしない。そういう連中を相手にしても時間の無駄だ。御引取願うしかない。もうひとつは本当に自分の頭でものを考えられる人間だ。この連中はそのままにしておけばいい。下手にいじくらない方がいい。どんなシステムにもそういう『選良』が必要なんだ。順調にいけば彼らはゆくゆく指導的な立場に立つことになるだろう。しかしその二つのグループの間には、上から命令を受けてその意のままに行動する層があり、その層が人口の大部分を占めている。全体のおおよそ 85 パーセントとおれは概算している。要するにその 85 パーセントをねたにおれはビジネスを展開しているわけだ」

・p.216（6本目の指）昔、灰田から聞かされた彼の父親の話だ。大分の山中の温泉旅館に長期逗留していたジャズ・ピアニストが、演奏を始める前にピアノの上に置いたという布袋一ひょとしてその中に入っていたのは、ホルマリン漬けされた彼の六本目の左右の指だったのではあるまいか？（中略）考えれば考えるほど、それは灰田の語った話に残された空白を埋める、有効な断片であるように思えた。

・p.224（アオとアカに会った話を沙羅に打ち明け、沙羅の高校時代のことを聞いたあとで）「それはそうと、スフレを一口食べない？ とてもおいしいわよ」「いや、君が最後の一口まで食べればいい」

・p.243 彼をいちばん苦しめているのは、沙羅が他の男と手を繋いで通りを歩いていたことではなかった。（中略）つくるとしてショックだったのは、沙羅がそのとき心から嬉しそうに顔をしていたことだった。彼女はその男と話をしながら、顔全体で大きく笑っていた。彼女がつくると一緒にいるとき、それほど開けっぴろげな表情を顔に浮かべたことはなかった。ただの一度も。彼女がつくるに見せる表情はどのような場合であれ、いつも涼しげにコントロールされていた。そのことが何より厳しく切なくつくるとの胸を裂いた。

・p.218（沙羅の台詞）「あなたたちは、性的な関心をどこかに押し込めなくてはならなかった。五人の調和を乱れなく保つために。その完璧なサークルを壊さないために」

・p.293（ユズ＝シロが、つくるとレイプされたと虚言した理由について、エリ＝クロの台詞）「いろんな理由が考えられるけど、どれもしっくりとは収まらない。うまく説明がつかない。でもひとつの理由として考えられるのは、私が君を好きだったということかな。それがあつてはひとつの引き金になったのかもしれない」（中略）「私としては、少しずつしるしを出していたんだもの、僅かなりとも脳味噌というものがあれば、簡単に気づいたはずなのに」つくるとはそのしるしについて考えてみた。しかし思い当たることは何もなかった。（中略）それから（つくるとは自分が微積分を教えていたとき）エリが時々頬を赤くしていたことをふと思い出した。「君の言うとおりだ。僕は頭の回転が人より鈍い」

エリは小さな笑みを浮かべて言った。「そういうことについてはね。おまけに君はユズに心を惹かれていた」（中略）

「そう、話はとても深刻だった。だから私としては君を切り捨てるしかなかった。つくるとには本当に気の毒だと思ったし、自分が君に対して残酷な仕打ちをしていることはよくわかっていて。そして私だって、君と会えなくなってしまうことは何よりつらかった。嘘じゃないよ。身を裂かれるような思いだった。さっきも言ったように、君のことが好きだったからね」（中略）

「でもね、私としてはまずユズを回復させなくちゃならなかった。それがその時点での、私にとっての最優先事項だった。あの

子は命取りになりかねない重い問題を抱えていたし、私の助けを必要としていた。君にはなんとか一人で冷たい夜の海を泳ぎ切ってもらうしかなかったんだ。そして君にならそれはできるはずだと私は思った。君にはそれだけの強さが具わっていると」

・p.299（エリ＝クロの台詞）「君を切り捨てたことは言うまでもなく、私たち全員にとって心の傷になっていた。その傷は決して浅いものではなかった」

・p.312（エリが、「私はユズの世話に疲れ果てて、見捨てた」と告白したあとに）「君はユズの保護者じゃないんだ。二十四時間付き添っているわけにはいかない。君には君の人生がある。できることには限りがある」
エリは首を振った。「私も自分にそう言い聞かせたよ。何度となく。でもそんなのは何の救いにもならない。私がある部分、自分を護るためにユズから遠ざかったというのは、間違いのない事実だからね。それはあの子が結果的に救われた、救われなかったとは別に、私自身の心の置きどころの問題でもある。おまけに私はその過程で、君まで失ってしまうことになった。ユズの抱えている問題を優先させることで、罪のない多崎つくくんを切り捨てなくてはならなかった。こちらの都合のためだけに、私は君を深く傷つけることになった。君のことがあんまり好きだったのにね……（中略）でもね、それだけじゃないんだ。正確に言えば、私が君を切ったのは、ユズのためを思ってというだけじゃなかった。それは表面的な理由付けに過ぎない。私がそうしたのは、結局のところ臆病だったからよ。自分に女としての自信が持てなかった。君のことをいくら好きになっても、君は私なんか相手にしないでだろうとわかっていた。君の心はユズに向いているんだらうと思っていた。だから君をああして容赦なくカットできたんだよ。それはつまり、君に対する気持ちを断ち切るためでもあった。もし私に少しでも自信と勇気があって、つまらないプライドさえ持たなかったら、たとえどんな事情があっても、君をあんな風に冷酷に切り捨てたりしなかったと思う。でもあのかのときの私は頭がどうかしていたんだ。本当に悪いことをしたと思う。心から謝るよ」（中略）
「僕はこれまでずっと、自分のことを犠牲者だと考えてきた。わけもなく苛酷な目にあわされたと思いつけてきた。そのせいで心に深い傷を負い、その傷が僕の人生の本来の流れを損なってきたと。正直言って、君たち四人を恨んだこともあった。なぜ僕一人だけがこんなひどい目にあわなくちゃならないんだらうと。でも本当はそうじゃなかったのかもしれない。僕は犠牲者であるだけでなく、それと同時に自分でも知らないうちにまわりの人々を傷つけてきたのかもしれない。そしてまた返す刃で僕自身を傷つけてきたのかもしれない」

（ユズを殺したのは自分かもしれない、と、つくるとエリはそれぞれに告白）

・p.322「君は彼女（沙羅）を手に入れるべきだよ。どんな事情があらうと。私はそう思う。もしここで彼女を手離してしまったら、君はこの先もう誰も手に入れられないかもしれないよ」

「でも僕には自信が持てないんだ」

「なぜ？」

「僕にはたぶん自分というものがないからだよ。これという個性もなければ、鮮やかな色彩もない。**こちらから差し出せるものを何ひとつ持ち合わせていない。**そのことがずっと昔から僕の抱えていた問題だった。僕はいつも自分を空っぽの容器みたいに感じてきた。入れ物としてはある程度形をなしているかもしれないけど、その中には内容と呼べるほどのものはろくすっぽない。自分が彼女に相応しい人間だとはどうしても思えないんだ。時間が経てば経つほど、僕のことをよく知るようになればなるほど、沙羅はたぶんがっかりしていくんじゃないか。そして僕から遠ざかっていくんじゃないか」（中略）

「たとえ君が空っぽの容器だったとしても、それでいいじゃない」とエリは言った。「もしそうだとしたら、君はとても素敵な、心を惹かれる容器だよ。自分自身が何であるかなんて、そんなこと本当には誰にもわかりはしない。そう思わない？ それなら君は、どこまでも美しいかたちの入れ物になればいいんだ。誰かが思わず中に何かを入れたいくなるような、しっかり好意の持てる容器に」

・p.363 シロがあのかのとき求めていたのは、五人のグループを解体してしまうことだったのかもしれない。そういう可能性がつくるの頭にくらぶ。中略 楽園はいつしか失われるもの、との記述のあとに）シロの精神はおそらく、そういう来るべきものの圧迫に耐えられなかったのだらう。今のうちにそのグループとの精神的な連動を解いておかないことには、その崩壊

の巻き添えになり、自分も致命的に損なわれてしまうと感じたのかもしれない。沈没する船の生む渦に吞まれ、海底に引きずりこまれる漂流者みたいに。（中略）

シロはおそらくそんな状況から逃げ出したかったのだろう。感情のコントロールを絶え間なく要求する緊密な人間関係に、それ以上耐えられなくなったのかもしれない。シロは五人の中では疑いの余地なく、最も感受性の強い人間だった。そしておそらく誰よりも早く、その軋みを聞き取ったのだろう。しかし彼女には、自らの力でその輪の外に逃れることはできない。そこまでの強さを彼女は具えていない。だからシロはつくるを背教者に仕立てる。つくるはその時点で、サークルの外に出て行った最初のメンバーとして、その共同体の最も弱いリンクになっていた。言い換えれば、彼には罰される資格があった。

◆ Okei の考察ポイント

- ・シロの虚言に端を発した、つくるへの「無言のハラメント」の背景に、墮胎を繰り返してきた家庭（父親）からの抑圧
- ・シロとクロの関係は、「1つのコップに容れられた生卵」の状態にも思える
- ・どちらが加害、被害ともいえない「因縁」
- ・同様に、大学教授である父親からの抑圧が強かったと思われるアカも、社会的に成功しながら、円滑な人間関係を築けていない。（短期間で離婚。同性愛と告白）

1 Q84

◆ 登場人物整理

・**青豆雅美** 高級スポーツ・クラブのインストラクター。物語中に 30 歳となる。「証人会」の信者家庭に育ち、勧誘などにつきあわされながら育つが、11 歳のとき自ら信仰を捨てて両親と決別。10 歳のとき手を握った天吾を思い続けている。スポーツ・クラブの生徒としてめぐり会った老婦人（緒方静恵、マダム）の依頼で、DV 被害者の報復殺人を請負う。体育大学で人間の身体の構造を熟知した青豆は、首筋の一点を探り当てそこに細い針を刺すことで瞬時に心臓発作と似た死を与える特技をもっている。過去に、高校時代の親友（大塚環）を DV で自死させた夫を、同じ方法で制裁している。「さきがけ」リーダー暗殺計画にかかわっていく。

・**川奈天吾** 予備校の数学教師。小説家をめざして執筆中。物語中に 30 歳となる。数学、ドラム演奏、柔道で優れた才能を発揮した神童だった。NHK の正規職員（集金人）である父親のもとで育つ。父親ではない相手といる母親の残像から、出生について疑問を抱えている。父親の集金につきあわされる少年時代。10 歳のとき手を握った青豆を思い続ける。編集者（小松）の勧めで新人賞応募作品『空気さなぎ』（ふかえり作）のリライトを担当したことで、「さきがけ」をめぐる事件に巻き込まれていく。

・**小松祐二** 文芸雑誌の編集者。一匹狼的。天吾の才能を評価して、新人賞応募作品の下読みなどの仕事を天吾に与えている。新人賞候補に、ふかえり作『空気さなぎ』を強く推す天吾に、リライトして完成作品に仕上げるよう指示。結果、『空気さなぎ』は新人賞を受賞し爆発的に売れる。

・**ふかえり（深田絵里子）** 小説『空気さなぎ』の作者。17歳。長い黒髪、美少女。識字障害（ディスレクシア）があり、長編小説や外国語の歌をまるごと暗記してしまう能力（サヴァン症候群）を持つ。両親とともに「さきがけ」という農業コミュニティ（※）で育つが、10歳のとき逃亡し、父の友人である戎野のもとにいる。

※はじめ農業コミュニ「タカシマ塾」に参加していたふかえりの父は、メンバーを再構成してみずから有機農法などをおこなうコミュニティ「さきがけ」を立ち上げた。宗教活動とはむしろ疎遠だった「さきがけ」は、1979年に宗教法人格取得。その頃から、ふかえりの両親である深田夫妻の消息が不明となる。1981年には、「さきがけ」から分派した武闘派の「あけぼの」が警察との間で銃撃戦となる事件を起こしている。

・**老婦人（緒方静恵）** 70代のマダム。麻布の高台にある「柳屋敷」に住んでいる。戦後すぐ夫と死別したあと、経営の才で蓄財した。スポーツ・クラブで青豆と知り合い、家でも個人レッスンを受けている。実の娘が夫からのDVで自死したことから、私財を投じてDV被害女性のためのセーフ・ハウスをつくるとともに、加害男性に対し、非合法を含む手段で隠密に報復をつづける。外交官の父と少女時代に海外生活を経験。

・**タマル（田丸健一）** 「柳屋敷」で老婦人の警護を引き受けているプロ。労働者として樺太に送られた朝鮮人の息子として生まれ、1歳のとき日本人帰国者に託されて北海道の孤児院で育つ。14歳で孤児院を逃亡後、ひとりで生きてきた。自衛隊のレンジャー部隊にいた経歴あり、空手の高位有段者。前科はなし。同性愛者。

・**牛河利治** 福助頭で、独特の雰囲気を持つ40代くらいの男。元弁護士。「さきがけ」の仕事を請け負って、小説「空気さなぎ」のリライトをした天吾に接近。また、リーダーの筋肉マッサージを担当することになった青豆の身辺調査を担当し、20年前の天吾と青豆の接点を探り当てた。リーダー不審死後も青豆を見張り続ける。

・**大塚環** 青豆の親友。都立高校のソフトボール部のチームメイト。結婚後に夫からのDVを苦に、26歳になる3日前に首吊り自殺。1年後に青豆は、周到な準備をしてその夫を秘密裏に殺害した。裕福ではあるが、父母の間はきわめて不仲。父親はほとんど帰宅せず、母親はしばしば錯乱状態に陥り、環と弟はほとんど捨て置かれた状態だった。青豆には及びもつかないほど成績優秀だが、「**男たちを前にすると、彼女の判断力は見事なまでにばらばらにほどけていった**」。学生時代に好きになった恋人、夫に選んだ相手はともに暴力をふるう人格破綻者。「男のことになると環はひどく頑なになり、青豆が何を言っても耳を貸さなかった」。大学院で司法試験の勉強をしていたが、24歳のとき結婚した夫の反対で法律の勉強をやめ家庭に入った。

※(book1 p.300) (死の直前に青豆に宛てて書いた手紙)「日々の生活は地獄です。しかし私にはこの地獄から抜け出すことがどうしてもできません。ここを抜け出したあと、どこへ行けばいいのかもわからないから。私は無力感というおぞましい牢獄に入っています。私は進んでそこに入り、自分で鍵を閉めて、その鍵を遠くに投げ捨ててしまったのです。この結婚はもちろん間違いでした。あなたの言ったとおりです。**でもいちばん深い問題は夫にでもなく、結婚生活にでもなく、私自身の中にあります**。私の感じるあらゆる痛みは、私が受けるに相応しいものです。誰を非難することもできません。あなたは私にとってのただ一人の友だちであり、この世の中で私が信頼することのできるただ一人の人です。でも私にはもう救いはありません。できれば私のことをいつまでも覚えていて下さい。いつまでも二人でソフトボールをやっていたらよかったのだけれど。」

・**中野あゆみ** 青豆より4つ年下の婦人警察官。家族や親戚にも警察官が多い。バーで青豆に声をかけられ意気投合し、青豆と2人で男を物色するようになる。「さきがけ」をめぐる事件の進行とともに、ホテルで不審死。

※(book1 p.523)「(幼い頃、兄と叔父にいたずらされた告白のくだり) もちろん別々にだけけど。私が十歳で、お兄ちゃんが十五くらいだったかな。叔父さんはもっと前のこと。うちに泊まりにきたときに二度か三度か「そのことは誰かに言った？」あゆみはゆっくり何度か首を振った。「言わなかったよ。絶対に誰にも言うなって言われたし、告げ口なんかしたらひどい目にあわされたりしそうな気がしたんだ。」(中略)「とくにお母さんにはね。お母さんは昔からずっとお兄ちゃんをひいきにしていたし、私にはいつも失望していた。(中略) **だからそれ以上お母さんを失望させたくなかったの**」

◆Okei の考察ポイント

- 青豆、天吾、ふかえり、タマル… 揃って生育環境が抑圧的。しかし、ハラスメントの加害側になっていない。克服のポイントは、自力で脱出している点？
- 大塚環、中野あゆみ… 抑圧的環境に育ち、被害側に。ハラスメントにあっても「言えない」構造。
- 老婦人の娘… 抑圧的環境だったかどうかは定かでないが、被害者に。
- コミュニオン、新宗教、集金人、警察界、塾、学校、さらにはリトル・ピープルのいる「空気さなぎ」の世界… …。いくつもの「小世界」に所属する人たちと、一匹狼的存在の小松、牛河。（アカのビジネスになじまないうちの、「反社会的な人間」？）
- 組織の「抑圧」から逃げてきた青豆、天吾、ふかえり、タマル。所属をもたず、自らの信念に忠実に生き抜くかれらは、「自己肯定感」を得ているといえるのかどうか。（アカのビジネスになじまない「自分の頭でものを考える」ほうの人たち？）
- 老婦人は、アカのビジネスになじまない2つのタイプ、両方の特性の中間か？